

Title	形容詞としてのabout
Author(s)	甲斐, 雅之
Citation	Osaka Literary Review. 31 P.1-P.9
Issue Date	1992-12-20
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25481
DOI	10.18910/25481
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

形容詞としての *about*

甲斐雅之

0. 本小論では、生成文法論の観点から *about to* - 不定詞の振る舞いを観察しながら、*about* がどの品詞（あるいは範疇）に分類されるかについて論じてみたい。

1. まず、当該 *about* の品詞について、その定義と共に主要な辞書の扱いを見ておきたい。

(1)

辞書	品詞	定義
<i>OED</i>	副詞	on the point of, going
<i>COD</i> ¹	副詞, 前置詞	occupied with
<i>RHD</i> ²	前置詞	on the verge or point of
<i>WEB</i> ³	前置詞	on the point or verge of
<i>LDCE</i> ²	形容詞	to be just ready to ; going to

(1) の表からもわかる通り、*about to*- 不定詞における *about* の品詞の扱いは様々である。この問題に関しては、伝統文法家の間でも揺れている。例えば、Jespersen (1933) は前置詞、Curme (1931) は副詞、そして、Onions (1929⁵) は形容詞相当語 (adjectival equivalent) としている。ただし、大半の辞書は当該 *about* を前置詞だとしている。これは恐らく、多くの辞書編纂者や文法家が、歴史的観点から現代英語において *about* が例外的に *to* 不定詞補文 (infinitival complement) を取る前置詞だと考えているからであろう。そう考える根拠として、(2)に見られるように、現代では使われて

いないが、*about* に動名詞補文を取る形式があったという事実が挙げられる。

(2) *I was about leaving* when the telephone rang.

確かに、動名詞があとに続いて同じ意味を表すことを考えると前置詞とすることもできるが、当該 *about* に関する限り、*OED* が示す古い定義(3a)と用例 (3b) から分る通り、もともと前置詞ではなかったことから、例外的に *to*-不定詞を補助部にとるとは考えにくい。

(3) a. *To be about (for) to do* : to be engaged in, to be busied in preparation for, to be scheming, preparing, or intending. *Obs.*
 b. *Satan is 3eorne abuten uorto ridlen þe ut of mine corne.*
 — *OED* (sv *About* A 12).

上例は1230年のものであるが、当時の *for to*-不定詞は現代英語の *in order to*-不定詞にあたるものである。ただし、*be about for to*-不定詞の形で成句として使われたいたとはいえ、*to*-不定詞の意味の違いから、現代英語のものとは構造が異なっていると思われる。

さて、*about* の品詞であるが、学校文法では主格補語の位置には、形容詞以外の *off* や *up* といった副詞も生じるとされているので、この段階では *about* が前置詞でないと言っても、少なくとも学校文法の立場からは、副詞とも形容詞とも決めがたい。¹⁾

(4) a. *I'm afraid the party's off.*
 b. *Inflation is up by 2%.* — 以上, *LDCE*²

2. 次に *about* が副詞であるという説に関して、2つの考え方があるように思われる。まず、前節で述べたように、副詞が主格補語になれるとする立場から、*about* を副詞とする考え方と、そして、*about* が *almost* のような近似詞 (*approximator*) であるとする考え方である。ここでは、主に、後者の立場について考えてみることにする。

Sadock (1981) は(5)に見られるような近似詞の *about* は、*about to*-不定詞という例外は除き、概ね、*almost* と分布が一致しているとしている。

(5) a. Bill is *almost* 6 ft. tall.

b. Bill is *about* 6 ft. tall.

— 以上, Sadock (1981).

(6) a. The day is *almost* over.

— 『ジーニアス英和辞典』.

b. The cocoa was *about* gone.

— *Reader's Digest*.

ちなみに、こういった近似詞の一種である *nearly* を Zagana (1988) は、動詞句 (verb phrase) の指定部 (specifier) に生じるとしている。すると、似たような分布を示す *about* や *almost* も動詞句の指定部に生じると考えられる。ただし、Zagana は動詞句にのみ関心を寄せているので、他の範疇の直前に生じる近似詞のことは述べていない。しかし、語彙によって差はあるが、近似詞が何らかの範疇の直前に生じることは確かである。そこで、近似詞の生起環境は(7)のようであると仮定したい。

(7) [AP [Spec 近似詞] X' ...]

(7)のスキーマに従うと、(6b) の *about* の現れる位置は(8)のようになる。

(8) The cocoa is [AP [Spec *about*] gone]

次に、*about to*-不定詞の分析に入る。*about* を近似詞と考える立場では、恐らく、*be to*-不定詞構文の間に *about* が割りこんでいると仮定するはずである (Cf. Hornby (1975²))。その証拠として、近似詞と同じ環境に生じる *only* のような排除詞 (exclusive) が *be* と *to*-不定詞との間に来ることが挙げられる。

(9) This I was *only* to learn later.

— Hornby (1975²)

ただし、to-不定詞を含む節の場合、to と *about* や *only* との相対的位置関係が問題になってくる。なぜならば、一般に *be* は動詞句内に生成され、INFL へ繰り上がり、一方、本動詞は動詞句内に留まると考えられているからである。be to-不定詞が Napoli (1989) の示しているように(10)、*be* が不定詞補文を取っていると仮定すると、²⁾ *about* は主節の動詞句指定部にあると考えられる(11)。

(10) Mary is [PRO to leave by 5].

(11) He [I' [was_i] [vp [about] [V' [t_i] [PRO to leave]].

しかし、そうすると、*seem* のような INFL へ繰り上がらない動詞の場合、語順の説明がつかなくなる。

(12) a. He *seemed about to* leap at Kate.

ということは、(13)に示すように、*about* は主節というよりは、むしろ補文内部に生成されると考えられる。ただし、この場合でも、to と *about* の語順が問題になるが、Pollock (1989) の言うように to が INFL に生成され、接辞移動 (affix movement) によって動詞句に付加 (adjoin) すると仮定することにより、問題はなくなる。³⁾

(13) NP_i seems [IP t_i [I' t_j [VP [Spec about] [V' [V to_j + V]...]]]

従って、(14)の補文の構造も *about* が、*only* に変わるだけで、(13)と同じになると考えられる (Cf. (9))。

(14) but their bold, expressionistic style *seemed only to* echo the famous "eccentrics" of the 17th and 18th centuries, whose paintings look strikingly modern. — *Reader's Digest*.

3. それでは、LDCE² の *about* が形容詞であるという根拠は何であろうか。恐らく、Quirk *et al.* (1985) の挙げる形容詞の基準によるものでは

ないかと思われる。その基準とは(a)限定用法の有無、(b) seem の後で叙述用法で使えるかどうか、(c) very で修飾できるかどうか、(d)比較級にできるかどうかの4つである。これらの基準に基づいて(15)のように形容詞と副詞の区別ができるとしている。

(15)	a	b	c	d		
hungry	+	+	+	+	} 中心的	
infinite	+	+	-	-		
old	+	-	+	+		} 形容詞
afraid	?	+	+	+		
utter	+	-	-	-	} 周辺の	
asleep	-	+	-	-		
soon	-	-	+	+	} 副詞	
abroad	-	-	-	-		

上の表から分かる通り、少なくとも(a)か(b)のどちらかが可能であれば、形容詞に分類されるということである。そこで、当該 about は(12)の用例で見たように seem の後に生じることから、asleep と同じ周辺の(peripheral)形容詞に分類することができることになる。しかし、(12)において、about が不定詞補文内部の動詞句指定部に生成される近似詞だとすれば、seem の後に来るabout を形容詞と考える根拠にはならなくなる。

4. ここまで、about の品詞(あるいは範疇)の決め方について、それぞれの立場の根拠について見てきた。本節では、LDCE²の立場を支持する別の根拠を挙げ、about が形容詞であることを証明してみたい。

2節では、(12)のように seem に続くabout を補文内に生じる副詞として分析できるとしたが、それでは類義の look の後に about が、用いられている(16)の例はどう分析できるだろうか。

- (16) *She looked about to capsize.*
 — *Reader's Digest.*

ちなみに、この例文は第2次世界大戦中に日本で建造された航空母艦「信濃」(=She)が、転覆しようとしている状況を、潜望鏡から目撃した米軍の潜水艦乗組員が表現したものである。

ここで連結動詞 (copula) *look* の特性について見てみたい。まず、*look* はその後に形容詞かあるいは叙述的な名詞句を取る。また、*to be* という形式に限って不定詞補文を許す。

- (17) a. *That book looks interesting.*
 b. *That looks an interesting book.*
 — 以上, *OALD*⁴
 c. *Judging by her letter, she looks to be the best person for the job.*
 — *LDCE*²

連結動詞の *look* は、主語と *look* の後に来る補語との意味関係 (thematic relation) の点で、*seem* と同じ繰り上げ述語であると考えられる。つまり *look* は、(17a-b) の場合、小節 (small clause) を、(17c) の場合、不定詞節をそれぞれ補部として取っていることになる。

- (18) a. $NP_i \text{ look } [{}_{sc} t_i \text{ AP/NP}]$.
 b. $NP_i \text{ look } [{}_{IP} t_i \text{ to be AP/NP}]$.

さて、(16)に戻ると、*look* の後の *about* は3節で述べたような不定詞補文内に生じる副詞であるといえるだろうか、もし、そうだとすれば、*about* は随意的な要素であるから、それがなくても容認されるはずであるが、実際は容認されない。この点で、*look* は *seem* よりも不定詞補文の選択に関して制約が大きいといえる。

- (19) **She looked to capsize.*

従って、*about* は単に補文内に生じる副詞とは考えられない。さらに、

sound のように to-不定詞補文を取らない連結動詞の後にも、about to-不定詞が来るということは、about が連結動詞の小節補文内にある形容詞だと考えたほうがよい。

(20) “Do you wish me to get your number, sir?”

She *sounded about to* unplug him.

“279-8009,” Jimmy said quickly.

— W. Richert, *Jimmy Readon*.

そして、about が1節で触れた補語として働く副詞だとしたら、(21)のように、非項 (non-argument) の there が about to の主語位置に現れた場合、be の後に来る主語は補語の副詞を修飾する副詞的不定詞の中に現れると言わなければならなくなる。about も bound 同様、(22)のような構造から派生した繰り上げ述語であることから (Cf. Postal (1974) ; Radford (1988))、学校文法的に単に連結動詞の補語として機能する副詞と考えるより、形容詞と考える方が自然である。

(21) a. *There is about to be* a fight in the kitchen.

b. *There is bound to be* a riot in Dacca. — 以上, Postal (1974).

(22) a. [[e] is [about [there to be a fight in the kitchen]]].

b. [[e] is [bound [there to be a riot in Dacca]]].

5. 石橋 (編) (1966) ではあまり議論もされずに、about が、形容詞であるという説が却下されていた。本小論では、生成文法理論の分析法を用いて、about の品詞 (あるいは範疇) が何であるかという問題に対して、about は形容詞であるという明確な解答が出せたと思う。

注

1) そもそも、(4)の例における、off や up の品詞が副詞か形容詞かは辞書によって異なっており、これらが副詞の補語用法と考えられるかどうかは疑問である。

- 2) Napoli は be to - 不定詞を叙述関係 (predication) について述べるのに用いただけで、特に be to - 不定詞について分析したわけではない。be to - 不定詞の別の分析に関しては Sawada (1985) を参照。
- 3) 実際、Pollock は VP に付加するとは言っているが、(13) に示すように to が V に付加するとは言っていない。しかし、(9) や (14) における only との相対的位置関係からしても、V に付加すると考えるべきではないだろう。

参考文献

A. 辞書

- Cowie, A. P. (1989) *Oxford Advanced Learner's Dictionary*. 4th ed. [OALD⁴] Oxford University Press.
- Fowler, H.W. & F.G. Fowler. (1982) *The Concise Oxford Dictionary of Current English*. 7th ed. [COD⁷] Oxford University Press.
- Gove, P.B. (1961) *Webster's Third New International Dictionary of the English Language*. [WEB³] C & C. Meriam.
- 小西友七、他 (編) (1988) 『ジーニアス英和辞典』大修館書店。
- Murray, J. A. H. et al. (1844-1928) *The Oxford English Dictionary*. [OED] Oxford University Press.
- Stein, J. (1973) *The Random House Dictionary of the English Language*. [RHD] Random House.
- Summers, D. (1987) *Longman Dictionary of Contemporary English*. 2nd ed. [LDCE²] Longman.

B. 著書・論文等

- Curme, G. O. (1931) *Syntax*. Heath.
- Fries, C. C. (1940) *American English Grammar*. Appleton-Crofts, Inc.
- Hornby, A. S. (1975²) *Guide to Patterns and Usage in English*. Oxford University Press.
- 石橋幸太郎 (編) (1966) 『英語語法大事典』大修館書店。
- Jespersen, O. (1933) *Essentials of English Grammar*. Lowe & Brydone Ltd.
- Napoli, D. (1989) *Predication Theory*. Cambridge University Press.
- Onions, C. T. (1929⁵) *An Advanced English Syntax*. 5th ed. Kegan Paul.
- Pollock, J. Y. (1989) "Verb Movement, Universal Grammar and the Structure of IP," *Linguistic Inquiry* 20, pp. 365-424.

- Postal, P. M. (1974) *On Raising : One Rule of English Grammar and Its Theoretical Implications*. MIT Press.
- Quirk, R. et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Radford, A. (1988) *Transformational Grammar*. Cambridge University Press.
- Sadock, J. (1981) "Almost," in Cole, P. (ed.) *Radical Pragmatics*. Academic Press. pp. 257-271.
- Sawada, H. (1985) "The Infinitival Marker *To* and Aux System in English," *English Linguistics* 2, pp. 184-201.
- Zagona, K. (1988) *Verb Phrase Syntax : A Parametric Study of English and Spanish*. Kluwer.